

地政学と世界観

茂木 誠

1. 地政学とは？

世界史を教えていますと、古代のローマ帝国から近代のフランス革命が起きる19世紀あたりまではほぼ説明がつかず、どの教科書にもちゃんとした説明があって学生にも納得できる説明ができます。ところが現代になればなるほど世界の動きを説明する統一的な理論がありません。20世紀に入り、第一次大戦の頃からたくさんの戦争がありました。20世紀というのは本当に戦争の世紀です。なんで戦争が起きるのか、それを今の教科書は主に思想の対立であると。例えばファシズム、全体主義、軍国主義 vs 自由主義、民主主義の対立であると。それで悪しきファシズム、軍国主義が倒されて、正義である民主主義が勝ったのが第二次大戦なのだとか教科書に説明しています。善である民主主義が勝ったはずですよ。ところがその後1945年以降世界は平和になったのでしょうか。実はそこから新たな戦争が絶え間なく続きます。

朝鮮戦争に始まって、ベトナム戦争があり、ソ連軍のチェコ侵攻があり、中東戦争が起こり、最近ではソ連のアフガン侵攻があり、湾岸戦争があり、そして9.11のあとイラク戦争があり、シリアの泥沼の戦争があり難民が発生し、いったいどこに正義と平和があるのでしょうか。今の世界の平和を守っている国際連合という組織があります。国際連合は第二次大戦の勝者が作った組織です。United Nationsと言います。連合された国々、連合と訳すことができます。悪しきファシズムを破ったはずの連合国が今世界を仕切っているのではないのでしょうか。それがなぜ平和を実現できないのでしょうか。という説明が全くできないのです。

現代史になればなるほど教科書の記述は、淡々と何年に何がありました。何年に何戦争がありました。勝ちました、負けました。この連続であってそこには何の理論もありません。それを入試に出す。学生はこれを丸暗記する。これでいいのでしょうか。それで私はかなり苦しませて、何かその現代世界の国々の動きを統一的に説明する理論はないかと、探した結果見つかったのがこの地政学です。私に地政学を教えて下さったのは、奥山真司さんという若手の先生です。この方も日本では学んでいなかったのですが、カナダとイギリスに留学し地政学というものを知り、日本人に教えようとしてブログ等で発信している方です。今日は地政学の根本的な物ごとの考え方から話していきたいと思います。

2. 国際関係論における理想主義 vs 現実主義

世界をどう見るか、あらゆる思想学問において二つの対立する方向性があります。一つはあるべき世界という理想世界を想定して、現実はこちらだがそれを乗り越えて理想世界に向かってゆこうという考え方、これを理想主義と言います。英語でIdealism アイデアリズムと言います。これにたいして、現実はこちらだからまず現実を受け入れよう、現実を少しずつ変えてゆくことで折り合いをつけるしかない。地に足の着いたものの考え方、これを現実主義、英語でRealism リアリズムと言います。

古代ギリシャの二大哲学者プラトンとアリストテレスがいます。プラトンが唱えたのが理想主義です。プラトンは私たちの生きている世界の外側に理想世界があってそれをIdea アイデア界と言いました。そのIdea界に世界を向かわせなければならないとして高大な理想を掲げたのがプラトンです。いやそうではない、私たちが住んでいるこの世界で生きてゆくしかない、と言ったのがアリストテレスです。

移民受け入れ。世界には貧しい国があります。貧しい国の人たち、一日百円で暮らしている人たちが先進国に来れば豊かな生活ができます。人々はどこに住んでも良いし、よりよい生活を求めるのは当然であって、移民たちが先進国に来るのは当然ではないか。世界には多くの戦乱や飢饉があり、そういう国の困っている人たちを受け入れるのは人類愛と理想の見地から正しいのではないか。ということで移民とか難民をどんどん受け入れようとする立場があります。これはまさに理想主義です。ドイツのメ

ルケル首相はこれを掲げました。中東のシリアで内戦が起きてもう何百万人が家を焼かれているのだから我々先進国は受け入れるべきだとしてドイツはシリア難民を受け入れました。シリア難民はドイツへ殺到しました。これは昨年 2016 年に起きたことです。結果として治安の悪化を招きました。昨年末、年越しの時に、ケルン他の都市で女性たちが難民に襲われました。

賃金の下落。安い賃金で彼らは働きます。ドイツ人の仕事が奪われました。そこで反動が生まれました。移民は入れるな、難民はお断りだ。ドイツでは「ドイツのための選択肢」という新しい政党が出来ました。指導者はフラウケ・ペトリーという女性ですが、彼女は無制限な移民受け入れはドイツの生活レベルを下げ治安を悪化させるから、これは断るべきだと言います。フランスも同じです。フランスでは国民戦線という政党のマリーヌ・ルペン党首が 2017 年の大統領選挙で二位につけました。これが現実です。

皆さんの子供の学費があればどれだけカンボジア難民の子供たちを養えたか。でも、カンボジア難民の子供を養うよりもまず自分の子供の教育です。これが現実の考え方です。いろんな例があります。

貿易自由化。世界には得意分野を持っている国があります。例えばニュージーランドは牧草地が多いので安い乳製品をたくさん作ります。日本は牧草地が少ないので工業に特化して日本の工業製品とニュージーランドの農産物を交換すればお互いの利点が活かされているのではないかと。何ら制限を加えず貿易を自由化し関税もゼロにして自由に貿易をしようとするのが自由貿易主義。それを掲げた共同体として生まれかけたのが TPP。環太平洋の国々で関税を無くして自由に貿易をしようとする話がかかなり現実味を帯びていたのですが、その結果、何が起きますか。確かにスーパーマーケットにニュージーランド製の安いチーズやおいしいヨーグルトが並ぶでしょう。その分日本の北海道の酪農農家は倒産します。

アメリカ、カナダ、メキシコが同じような経済自由化をやりました。NAFTA ナフタと言います。北アメリカ三国で国境を無くして自由に物と人を移動させようとした。何が起こったでしょうか。ヘリコプターで農薬を撒いているようなアメリカの大量生産の安い穀物がメキシコに入ってきた結果、メキシコの小さな農家はバタバタ潰れました。彼らは生活に困ってどうしたかという、穀物を作ることをやめてアヘンを作ったのです。アヘンを取り仕切るマフィアが横行し、マフィア間の抗争がほとんど内戦状態になりました。メキシコは滅茶滅茶になりました。これは NAFTA のせいです。

治安の悪化と生活苦に苦しんだメキシコ人は良い生活を求めてアメリカに殺到しました。メキシコとアメリカの国境は砂漠地帯でフェンスもあちこち破れているので簡単に突破できます。その結果、大勢のメキシコ人がアメリカに流入しました。それで今度はアメリカ国内で移民を入れるなどという運動が起きて、その上に乗ったのがドナルド・トランプです。ですからトランプを生んだのは NAFTA なのです。

全ての国は平和を求めているはずだ。誰だって戦争を望んでいないはずだ。だからまず我々が武器を捨てよう。我々から軍備を解消しよう。自衛隊はいらない。憲法九条があるじゃないか。これが Idealism です。素晴らしいと思います。我々はこの憲法を 70 年間守ってきました。その結果、周りの国々は平和になったのでしょうか。日本の周りのどこに平和国家があるのでしょうか。ロシアがなぜ国後、択捉を日本に返さないのでしょうか。韓国はなぜ竹島を返さないのでしょうか。中国はなぜ尖閣に領空、領海侵犯を繰り返すのでしょうか。北朝鮮はなぜ拉致被害者を返さないのですか。日本は平和憲法があるのに。説明がつきません。

国家というものはそもそも生存のために戦争も辞さない、拉致もする、生き残るためにこれはしょうがないという考え方、これが Realism です。全ての国家が、生き残るために武力を持ち、時には戦争をし、拉致もする、そういうものだとして我々はそれに備えるしかない。地政学は徹底的な Realism です。

3. リアリズムとしての地政学 Geopolitics

・国家は地球上の特定の場所から動けない。コロンブス以前の人たちが考えていたように地面がまっ平でしかも永遠に広がっているのであれば、もし争いがある場合は、争いを避けてどんどん移動すれ

ばよいのです。残念ながら地球は球体であって面積には限りがあります。そのほとんどは海、または山であって人の住めるところは少ないのです。そして人間は無制限に増えます。従い、狭い土地をめぐる争うのはしょうがありません。そうすると敵はまず隣国です。地球の反対側と争いはできません。日本がブラジルとぶつかるでしょうか。日本の敵はロシア、中国、韓国や北朝鮮です。隣人だからです。隣だから仲よくしよう、というのは逆です。隣は敵です。だから敵をどうコントロールするかということです。ただ戦争は避けたい。戦争を避けつつ国益を守る方法を考えます。国家の行動原理は「生き残り」であって、国家は移動できないということから、その国が置かれた地理的条件が重要になってきます。

・国家の置かれた地理的条件からその国家の行動は予測できます。これが地政学のポイントです。具体例を挙げます。なぜ日中がぎくしゃくするのでしょうか。隣国との間では、国境線や領海、EEZを巡る紛争が起きます。EEZ（排他的経済水域）は領海の外側にある海域で、その資源を独占的に利用できる地域です。相手の国との位置関係、力関係で外交案件は決まります。

中国は大きな国ですが、海岸線は短いです。中国の持っている海は二か所しかありません。東シナ海と南シナ海だけです。ここはいずれも海底資源が豊富です。中国は過剰人口を抱えています。中国は石油やガスの自給ができません。従ってそれを求めて生き残ろうとするのは当然です。ところがこの海域は日本にとっても大事です。日本は、原発が止まったこともあり、いまだにエネルギーのほとんどを中東に頼っています。そうすると中東から来る日本のタンカーは必ずシーレーンといいますが南シナ海航路を通ります。ここを中国海軍がわが物に航行して、場合によっては日本のタンカーを拿捕できる状況になれば日本は首根っこを押さえられます。だからぶつかるのです。もし日本列島がもう少し東側で、ハワイの隣にでもあればどんなに平和だったか知れません。

4. ドイツ地政学

地政学という考えを唱えた学者を何人かご紹介します。二つの流れがあります。ドイツ地政学とそれからイギリス・アメリカ地政学です。まずはドイツ地政学から参ります。19世紀の後半です。

ラッツェル先生。この方はもともと地理学者です。生物学も研究しています。生物は縄張りを持っている、と同時に国家も縄張りを持つのは当然だと考えました。国家をあたかも一つの生き物のように考えます。これを国家有機体説と言います。その縄張りの事を生存権と呼びました。ちょうど19世紀の後半はアメリカが西部開拓をした時期です。ラッツェルはこれを見て、これは正しい、アメリカが西部開拓をやって生存権を拡大しているのは当然である、わがドイツもそうするべきであるとしました。これは後に東ヨーロッパに対する侵略を正当化することに利用されます。

チャーレン先生。スウェーデンの方ですが、民族的にはドイツ系です。ドイツは絶えずフランスと巨大なロシアに挟み撃ちを受けている非常に際どい位置にあり、しかも長い間国内がばらばらで統一国家ではありませんでした。そこにビスマルクという天才が生まれて、フランスとロシアをうまく御しながら、ちょうど日本の明治維新の頃に、統一ドイツを作ったのがビスマルクでした。できたばかりのドイツ国家をいかに生き残させるかと彼らは考えたのです。チャーレンは、国家に必要な資源を外国に頼っている国は亡びるから自給自足体制を確立せよといいました。地政学、Geopoliticsという言葉は初めて使ったのはこのチャーレンです。

ドイツ地政学の大御所を紹介します。ハウスホーファー。南ドイツのバイエルン出身でドイツ陸軍の将校です。日露戦争がありました。極東の小さな島国がロシアを粉砕したニュースが伝わりました。その日本陸軍がドイツに指導者として砲兵の教官を募集すると言ってきました。それで彼がドイツから日本陸軍に派遣されました。飛行機が無い時代です。船で来ました。アフリカの喜望峰を回り、インド洋、マラッカ海峡を通過してやって来ました。彼が見たものは、どこへ行っても翻っているユニオンジャック、イギリス国旗です。日本より小さな島国が世界中に植民地を作っている光景を見て彼はショックを受けました。日本に着きました。彼は学者でもありあらかじめ日本の文化、言語、宗教を徹底的に研究しています。この人は、日本語はもちろん、朝鮮語、中国語、チベット語も出来た人です。彼の書いた本で一番多いのは日本関係の本だということです。

このアジア人はどうやら、わがドイツにとって使える、日本はロシアに勝った海洋国家なので、日本海軍を使ってイギリスにぶつけるというプランが彼の頭の中に芽生えました。敵はイギリスであって、イギリスの植民地支配を粉碎しなければならない。でなければドイツの将来はない。ドイツも植民地を持ちたい。そこで世界四分割構想。イギリス以外の4大国で世界を分けよう。アメリカ、ドイツ、ソ連、日本です。わがドイツはヨーロッパに覇権を持ち、イギリスやフランスの植民地であるアフリカ中東を奪い取る。ここにアフリカとヨーロッパを束ねた自給自足体制を建てる。アメリカに手は出さない、アメリカはアメリカ合衆国に任せる。米独は戦わない。ソビエトに中央アジア・インドを任せよう。ソ連とも戦わない。残りの東アジアやオーストラリアは日本に任せよう。こういうことを彼は唱えました。パンリージョン・プランと言います。彼は得意の日本語で当時の日本の政治家や軍人にこれを説いて回ったのです。日本の軍人や政治家は喜びました。ここから後に大東亜共栄圏というプランが出て来ます。種を蒔いたのはこの人です。

ドイツに戻りました。ヒトラーという若い政治家がクーデターを起こしました。すぐに捕まりミュンヘンで投獄されます。ミュンヘンはハウスホーファーの故郷です。獄中のヒトラーに彼は会いに行きます。ヒトラーの側近だったルドルフ・ヘスという後にナチスの副大統領になった男が、実はミュンヘン大学でハウスホーファーの教え子です。そのヘスがヒトラーとの面談の機会を作りました。彼は獄中のヒトラーにこのプランを滔々と説きました。ナチス党の幹部にこのハウスホーファーの影響を受けた人たちがたくさんいます。ヘス副大統領や、後の外務大臣のリッペントロップです。

このリッペントロップが敵はイギリスであってソ連とは手を組むべきだとヒトラー総統に進言して、実現したのが独ソ不可侵条約というプランです。日本でも親独派が台頭します。代表的なのが松岡洋右外相です。松岡はベルリンへ飛びヒトラーと会って日本とドイツで世界を分割しようと提案します。これが後の日独伊三国同盟になって行きます。更に松岡はモスクワへ行っています。日ソは戦わない、日独伊三国同盟にソヴィエトを加えて日独伊ソ四国同盟を作ってユーラシアを支配する、こうすれば誰も手出しできないというプランでした。もしこれが実現していたら、あの戦争は日本が勝っていた可能性があります。これをぶち壊した男がいます。ヒトラー本人です。ヒトラーはもともとロシア人を全く信用せず、突然にドイツ軍がソ連になだれ込んでいって、この四国同盟プランは崩壊しました。その結果ドイツは負けます。

5. アメリカから見た世界

アメリカの運命を決するのは海です。同じ海洋国家のイギリス、この小さなイギリスが世界に艦隊を浮かべて、世界の富を独占しました。19世紀のイギリスは世界の超大国でした。わがアメリカもそれをやれば、やがてはアメリカがイギリスに代わって世界を制することができると思った軍人がいます。アルフレッド・マハン、アメリカ海軍大学の教官です。海洋国家が世界を制す。海洋国家の事をマハン先生はシーパワーと名付けました。歴史的にはオランダの東インド会社、次にイギリス、その次にアメリカが世界を制すると予言した人です。

アメリカの始まりは東海岸です。おもな工業地帯がここに 있습니다。ここで生産したものを世界に売り込んで行く。マーケットを求めます。問題があります。大西洋からアフリカ方面へは簡単に行けますが、アジアへどう行くのか。今も昔も世界最大のマーケットは中国です。中国にアメリカ商品を売り込むためにはどう行ったらいいか。北極は凍っており行けません。アメリカ西海岸まで鉄道輸送ではお金がかかります。南米をグルッと回るルートは問題があります。南米の南の先端、南極に近いところはドレーク海峡と言います。「荒れ狂う南緯40度」と言ひまして、暴風雨が吹くところで船がよく沈みません。危険すぎてここは通れません。そこでアフリカ最南端の喜望峯、ここは南極からも距離があって安全です。ここを通過してインド洋に出てマラッカ海峡を抜けて中国、このルートです。ペリー来航もアフリカ周りです。

でも遠すぎる。近道をしたい、ということでカリブ海に入ります。パナマを歩いて太平洋に出る、このルートは近くてよいのですが、船一隻では行けない、いったん降りて陸路を通過して新しい船に乗り換えます。パナマに運河を作れ、と言ったのがマハン先生です。アメリカは中国市場を手にするために

パナマを抑える。外国にパナマを奪われないようにするためにキューバ、プエトリコに米軍基地を置く、更に太平洋ではハワイに軍港を築く、フィリピン、グアム島に基地を作る、こういうプランをマハンは立てました。これを彼は、当時のアメリカの海軍次官だったセオドア・ルーズベルトに説き、賛同を得ました。その後アメリカは正式にこれを採用して実際にキューバを取り、ハワイを取り、フィリピンを取りました。今のアメリカの巨大国家化のプランを作ったのがマハン先生でした。マハンは日本に来ています。1867年江戸時代最後の年に、徳川慶喜を自分の軍艦に乗せています。日本人について彼は、今は遅れているがすさまじいポテンシャルを持っている。やがて半世紀もすれば軍事大国になる、日本を警戒すべきだ、と言っています。何とか日本を手なずけて、イギリス、ドイツ、日本で同盟を組んでロシアの南下を止めるべきだ。というのがマハンの考えでした。

パナマ運河は最近拡張しましたが、長らく幅が32メートルでした。これを超える軍艦は通れません。これがアメリカ海軍を縛りました。アメリカ海軍は幅32メートル以上の軍艦を作れない。これをパナマックスと言います。アメリカがハワイを占領した4年前に、日本は日清戦争に勝ち台湾を取りました。この結果、フィリピンを抑えたアメリカと台湾を取った日本は隣国になりました。敵になったわけです。日本海軍は、日本が海洋国家になるためのプランを誰に学ぶかと、マハンだと、盛んに留学生をアメリカに送り込みました。日露戦争でバルチック艦隊を粉砕した東郷平八郎の側近である秋山真之はマハンの家に泊まり込んでいます。マハン仕込みの地政学を学んで彼は帰ってきました。だからマハンは日本海軍の父でもあります。当然、日本側はアメリカ海軍の弱点に気づきました。パナマ運河です。日本海軍は、32メートルを超える軍艦を作ればよい。大艦巨砲主義です。その結果生まれたのが大和です。39メートルあります。

アメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトは、これは将来日本とぶつかるなど予感し、軍に命令し作戦プランを立てました。アメリカ海軍は世界中の主要国との戦争計画を持っています。例えば、対ドイツ戦争はブラックプラン、対日本戦争はオレンジプランと言いました。このオレンジプランによると、まともに戦ったらアメリカは日本に負ける、日本は強すぎる、日本はロシアに勝った。だから軍艦の数を制限して、アメリカが10で日本が7だったら互角、6にすればアメリカは勝てる。そこでアメリカ国務省は日本に対して軍縮を呼びかけました。第一次世界大戦が終わった後だから、アメリカも減らすから軍縮しよう。日本はそれに乗りました。決まった軍艦の保有割合は、アメリカ、イギリス、日本が5対5対3です。つまりアメリカが10として日本には6しか軍艦を持たせない。これをワシントン海軍軍縮条約と言います。日本海軍は当然、これは毘だと、アメリカは日本海軍の数を減らして将来の日米戦争で勝つつもりだと、政府に訴えたのですが、政府は聞きませんでした。今は日米友好がより重要だとして通しました。幣原外相の協調外交です。

結局、日米戦争になりました。日本軍は、ハワイ真珠湾を叩きました。アメリカのシーレーンの破壊です。当時の飛行機はハワイまで飛ぶ力が無かったので航空母艦を使いました。世界史上初めて空母で爆撃機を運んで、空爆で艦隊を破壊する、ということをやりました。最終目標は実はパナマ運河でした。では、パナマ運河まで米軍にバレずにどうやって日本の飛行機を持ってゆくか。潜水艦を使おう。潜水艦を大きくして、格納庫を作って、中に飛行機の羽根を折りたたんで入れて、近くで浮上して一気にパナマ運河を空爆して潰してしまうプランを日本海軍が作りました。伊400という世界最大級の潜水艦を建造し、中に晴嵐という飛行機が入ります。これは実際に出港したのですが、1945年、遅すぎました。当時すでにアメリカが完全に制空権を握っています。パナマに着く前に戦争が終わりました。当時から日本の科学技術はすごかったのです。例えば原爆も作っていました。仁科博士が設計図まで作っていましたが間に合いませんでした。核保有国は、核保有国を攻撃できません。反撃が怖いからです。どうしてトランプは北朝鮮を攻撃できないのでしょうか。もう核を持ってしまったからです。金正恩が核をどこで使うか分からず、怖いからです。もし日本の核兵器が45年に間に合っていたらアメリカは広島・長崎に核を落とすとしたでしょうか。

6. イギリス地政学

最後にイギリス地政学です。世界の覇権国家だったイギリスの地位をどう守るか考えたのがマッキ

ンダー先生、オックスフォードの地理学の先生です。オックスフォード大学に初めて地理学科を作りました。当時は19世紀、イギリスの敵は海上にはいません。陸にはいます、ロシア帝国です。イギリスは自給もできない小さな島国だから、植民地経営、貿易で生きてゆかねばなりません。この植民地経営を脅かしているたった一つの大国はロシアでした。ロシアの膨張政策、南下政策は必ずイギリスの植民地、エジプト、イラク、イランやインドを脅かします。ロシアをどうするかということがイギリスの戦略の第一でした。

マッキンダーはいいいます。ユーラシア大陸は一個の島だ、これを世界島と呼びます。この世界島の中心にロシアがあることは動かさない。北極海は凍っているのでイギリス海軍はここからは攻め込めない。それから、ロシア自体が大きすぎて、たとえイギリスが陸軍を派遣して内陸に攻め込んだとしても、補給線を維持できない。かつてフランスのナポレオン・ボナパルトがロシア遠征をやって補給の問題から大失敗しました。ヒトラーも後にロシアに攻め込んで補給の問題から大失敗しました。こういうことをやってはいけない。大陸国家に対して攻め込んではいけない、墓穴を掘ってしまう。ロシアは滅ぼせないから封じ込めろ、経済封鎖で徐々に弱らせる、となります。ロシアの周りに防波堤になる国をたくさん作る。特に東ヨーロッパにロシア領の少数民族をどんどん独立させて、例えばポーランドとか、バルト三国とか防波堤を作って行く考えです。これはロシア革命の後に実現しました。東ヨーロッパに独立国家を建てロシアを封じ込めた体制をヴェルサイユ体制と言います。

スパイクマンは、戦後のアメリカの世界戦略のプランを作った人です。基本的な考えはマッキンダーと同じで、敵はロシア。ロシアを封じ込めろ。アメリカは引きこもっている場合ではない。ロシアが出てきたらアメリカのシーレーンが破壊され世界が終わるから、世界の警察官になって外へ出て行ってロシアを封じ込める。ユーラシアの縁の地域にアメリカの軍事基地を展開すべきだ。縁をリムということで、リムランドに基地を展開すべきだと言いました。戦後のアメリカの世界戦略のままですが、彼はこれをまだ日米戦争中の1943年に唱えました。敵はソ連だ、早く日米戦争を終わらせて日本を同盟国にして、日米同盟でロシアをまた中国を封じ込めるべきだと言ったのがこのスパイクマンです。彼は日本のスパイとか裏切り者呼ばわりされ袋叩きにあったのですが、彼の予想は全て当たったのです。だから、世界の見方が分かる人は未来を予測できるということです。確かに現在、世界にあるアメリカの基地はロシアと中国を封じ込めており、ここに米軍はミサイルを展開しています。日本はアメリカの世界戦力の一環になっています。これはマハンに始まりスパイクマンに至るアメリカ地政学の具現化です。

【質疑応答（抜粋）】

Q：最近のウクライナ問題の本質はなにか？クリミア併合にはロシアの正義はあるか？

A：クリミア問題とは何か。かつてここはロシア帝国領でした。ロシア帝国の最大領土にはバルト三国、フィンランド、ポーランド半分、ベラルーシ、ウクライナも入っていました。これがソヴィエトに受け継がれ、1991年ソ連の崩壊とともに、ウクライナが独立しました。もちろんウクライナ独立の背後にはアメリカがいました。ウクライナに親米政権を作ることで対ロシア防波堤にしたのです。ところがクリミア半島は、かつてロシア帝国時代にロシア人が入植して開いた場所です。人口の6割がロシア人です。ロシアとしてはクリミア半島の軍港を今後も使いたい。ここを抑えておけば黒海、地中海に出られる。どうしてもクリミアだけは放したくない。ところがウクライナの親米政権はクリミアにいるロシア軍は出て行けと言いだして、それでぶつかったのです。プーチンは、それでは住民投票だとして、住民投票の結果、クリミアからの要請があったと大義名分を作り、併合しました。ロシアとしては南に出たい、そのための軍港を使いたいと生き残りをかけているということです。これがウクライナ問題です。邪魔しているのはアメリカです。

Q：日本でどうして地政学を教えていないのか？

A：戦前の日本がドイツ地政学にはまり過ぎた、あれで国を滅ぼしてしまった、という苦い教訓があるので地政学はやばいという意識があった。それにアメリカの占領政策です。日本人が独自の戦略を持っては困るわけで、日本には「金魚の糞」でいて欲しいわけで、日本人が物事を考えないようにしてしまいました。日本人の戦争に対する反省とアメリカの占領政策が理由です。

Q：国の存立を守るのは善悪で判断するのではなく、隣国同士の力関係で相手より優位に立つかがキーポイントです。国を維持してゆくため憲法改正が必要と思いますが、その前にアメリカの占領政策に洗脳された日本の国民感情をどうリセットできると思いますか？

A：既にリセットは始まっています。私の教え子たち、特に若い世代は非常にリアリスティックです。世代交代でこれは変わります。私の予想では 10 年以内に憲法改正できます。日本人の世論を一番変えてくれたのは挑発を繰り返す習近平さんと金正恩さんです。

Q：I S のテロは地政学でどう説明できますか？

A：基本的にロシアの話と繋がります。シリアという国の特徴です。シリアは地中海に面した国です。ロシアは地中海に港がありません。シリアを同盟国にしておくことによってロシアは地中海にアクセスができる。だからロシアは一貫してシリアの政権、アサド政権を支援して来ました。これはアメリカにとって困るわけで、アメリカはシリアを叩くことになります。アサドが独裁体制で、国民の自由を奪っていて、少数民族を抑圧していて、毒ガスも使っていて、というキャンペーンをアメリカはずーっとやってきました。アラブの春を仕組んだのもアメリカです。アサドを倒すための反政府勢力に対して援助を始めたのもアメリカです。反政府勢力の一部が I S です。ということは、I S は必ずしもアメリカにとって敵ではなかった。敵はアサドであった。オバマ政権の時に I S が出て来ましたが、なぜずーっと手をこまねいて来たのかと言えば、I S がアサドを叩く分には全然問題がなかったからです。ですから I S をのさばらせたのはオバマです。ロシアの拡大を止めるためです。

Q：北方四島の返還は可能か？

A：不可能です。ロシアの側に立てば分かることです。あり得ません。今はロシア軍が自由に使っていてオホーツク海はロシア軍艦が自由に航行できています。もし北方四島を日本に返還するとどうなるか。ロシア軍は撤収になります。代わりに入ってくるのは米軍です。日米安保条約により、アメリカは必ず入ってきます。そうするとオホーツク海のロシア軍艦が安全を脅かされます。プーチンが認めるはずがありません。北方四島を返還させる方法があります。それはロシア軍の駐留は今まで通り認めること。沖縄は米軍駐留のまま日本に返還させました。あの方式です。日露安保条約を結んで、ロシア軍駐留のまま日本に返還するという事です。当然にアメリカは激怒するでしょう。日米関係を毀損してまでそれができるかどうか、ということです。

Q：日本とモンゴル。日本ではモンゴルの情報が無い。中国寄りと言われるが、北朝鮮と比べて中国はモンゴルをどういうふうに見ているか？

A：モンゴルは結構大きいですが、隣国が 2 か国しかなく、それもロシアと中国で最悪です。ロシアと中国をうまくバランスとして生きてきた国です。北朝鮮の一番の敵は実は中国です。隣国だからです。北朝鮮とモンゴルは結構親密で、両国の潜在的な敵は中国です。中国は、モンゴルは危険だと見ています。このモンゴルの南の内モンゴルには独立運動があります。内モンゴルが独立運動を起こしてモンゴルと合体して大モンゴルになることを中国は恐れています。

Q：中国の一带一路をどう見ますか？この戦略の中で日本の占める役割は？

A：中国の一带一路というのは、シルクロードを復活するという話で、中央アジア経由とインド洋経由になります。経済と軍事は一体ですので、港を開きます、貿易をします、という時は必ず軍港になります。中央アジアを鉄道で中国軍が移動する、インド洋を中国海軍が移動するという事になりますから、これに一番神経質になっているのはインドです。インドは中国にインド洋上の「真珠のネックレス」で首を絞められて行く感じになります。冷戦期のインドは反米でしたが中国が台頭した近年は親米に転じ、アメリカと日本とインド洋で合同軍事演習を始めています。日本もシーレーンを巡って中国と競い合いますので他人ごとではありません。

Q：日本の地政学上のリスク、シーレーンの確保はどう守りますか？シーパワーをどう補強しますか？

A：現状、日本のシーレーンを守っているのは米軍です。横須賀に基地のある第 7 艦隊です。海上自衛隊は数が足りません。尖閣だけで手いっぱいです。もしアメリカが南シナ海から撤収するようになった場合には、必ず中国が代わりに入ってきますから、いつでも中国は日本の首を絞めることができる。それがいやだったら自衛隊の艦船の数を倍ぐらいに増やさなければなりません。防衛費が GDP の

1%では少なすぎてだめです。NATOの加盟条件はGDP 2%の軍事費です。

Q：中国の地政学について教えて下さい。米中関係、第一列島線、第二列島線、北朝鮮の位置づけ？

A：中国が東シナ海、南シナ海に手を出そうと決めたのは70年代の鄧小平です。鄧小平の側近だった劉華清という海軍司令官が、2010年までに沖縄と台湾を結ぶ第一列島線から、2020年までに小笠原とグアム島を結ぶ第二列島線から、それぞれの内側の米軍をたたき出して中国の海にするというプランを作りました。全然進んでいません。遅れています。今必死になって中国は沖縄の米軍を追い払おうとして沖縄の反基地運動などを支援しています。北朝鮮の位置づけは微妙です。一番長い国境を接しているのは中国です。国境の北にも朝鮮人が大勢います。延辺朝鮮族自治区の朝鮮民族が独立運動を起こすと北朝鮮と合体します。これはモンゴルと同じで時限爆弾です。中国は従い朝鮮民族をも抑え込んでいます。中朝も敵対関係です。

Q：石原莞爾の最終戦争論は、最後は日本とアメリカが戦うことになっているが、大東亜戦争はその順番を誤った。正しい順序で日米戦争になっても結局負けたらどう。当時の地政学者には最終平和論というのはなかったのか？

A：満州事変を起こした陸軍軍人の石原莞爾は、やがて小さな国がつぶされて大きな国が残って行く、最後に残るのはヨーロッパ覇者のアメリカとアジアの覇者の日本であり、20世紀の後半に日米が最終決戦をするだろう。そこで物質文明のアメリカを打倒して精神文明の日本が正義を実現する。これが石原の最終戦争論です、彼は日蓮宗で基本が理想主義者です。彼はアメリカに負けたあと、東京裁判に出頭しますが、驚くことに晩年には、「平和憲法を守ろう」といっています。理想主義者は極端で、私はあの人の考えには賛成しません。

Q：国際金融資本は、地政学ではどうなっているのか？

A：国際金融資本つまり巨大銀行は、国境線を取り払いたいグローバリズムです。地政学とは真逆の考え方です。民族なんかはどうでもよい、国なんかは無くても良い、国境をなくしてお金もモノも人も自由に移動させようというのが彼らの考えです。対して、自分の国を守ろう、国境線を堅く閉じよう、領海を警備しようというのが地政学ですから、真逆の考え方です。

Q：フランスが今回の講義に出て来ませんが、フランスの知性といわれるジャック・アタリは地政学的な考え方を持っていないのですか、違う考え方があるのですか？

A：フランス人はデカルトを生んだ国民性からか、理想主義です。フランス革命自体が自由、人権を掲げて起こした革命ですので地政学的な発想は出て来ません。アタリも地球連邦政府をつくれ、みたいな発想です。フランス人の地政学者を私は知りません。

フランスは地理的に半ば半島ですので、イギリスみたいに完全な島であれば海外展開だけを考えれば良いのですが、隣にドイツという厄介な国があります。ドイツにどう対抗するかということが常に国防の最重要課題でした。ドイツとの緊張に耐えかねて最後はEUという理想を掲げました。今回の大統領選挙でも、反EU、フランス第一主義のマリーヌ・ルペンが最後は負けて、EU残留派のマクロンが残ったということは、ドイツとの関係が悪化するとフランスは生き残れないということでしょう。

Q：中国の戦略的辺境論をどう考えますか？中国が経済力をベースに移民がどんどん海外へ出てゆき、国境など関係なく世界を制覇するという事らしいですが。

A：地政学的には当然です。群れが大きくなればより大きい縄張りを取るのが生物です。中国には軍事占領の他に移民を送るという最終兵器がありまして、中国系移民を増やしてゆくことでその国を実質支配しようとしています。今それをやっているのがオーストラリアです。カナダは富裕層の移民優遇制度を廃止し、移民制限を始めました。アメリカは今のところ制限していませんので中国人がどんどん移住しています。アメリカ国内では中国系の人たちが力を持って、既に地方議員などは中国系の人がたくさんいますので、やがては上院議員、近い将来には大統領と、リーさんとか王さんとかいう名前のアメリカ大統領ができることは今から想定していた方がよいでしょう。

茂木 誠（もぎ まこと）先生のプロフィール

東京都出身。駿台予備学校世界史科講師。ネット授業のN予備校世界史講師。首都圏各校で「東大世界史」等の国公立系の講座を主に担当。iPadを駆使した独自の視覚的授業が支持を集めている。

著書に『経済は世界史から学べ』（2013）、『ニュースのなぜ？は世界史に学べ』（2016）、『マンガでわかる地政学』（2016）、『図解 世界史で学べ！地政学』（2016）、『学校では教えてくれない地政学の授業』（2016）などがある。

ブログ「もぎせかブログ館」「もぎせか資料館」を公開中。